

彙報

●史學研究會大會

十一月二十三、二十四、二十五日の三日に互つて昭和九年度本會大會を行ふ。

第一日は午後一時より京都帝國大學樂友會館講演室に公開講演會を開き、左の三氏の講演あり、來會者三百余名、其間例年の如く評議員選舉をなし、全部重任となる。講演會後引き続き同所に晚餐會懇話會を催し出席者約五十名、午後十時散會。

●渤海文化の考古學的觀察

(幻燈使用) 原田 淑人氏

渤海東京城の發掘調査は學界多年の懸案であつたが、幸、滿洲國の建國とともにその機會を得、昨年と今年に互つて發掘調査が行はれた。その結果を云へば、東西一邦里餘、南北一邦里弱の都城があり、その内部北より内城があり、内城の南部には諸官衙があつたであらうが、北部は禁城で、多數の宮殿址を存してなり、その東に禁苑の一劃がある。内城の前面には朱雀大路とも云ふべき中央大街があり、それにクロスして内城前に東西の大道があるなど當代條坊の制もほゞ窺ひ知ることができ。内城の大門は中央大街の頭にあり、この正面一直線上に六つの宮殿址があり、それらを結ぶ多數の廻廊がある。

今回は主としてそれらを發掘調査した。第一宮址は高い土臺上にあり、五鳳樓といつていま廟がある。第二宮址は最も主要なる建築物で、その基壇の前から七つの石彫獸頭が發掘された。第三宮殿は破壊甚しく調査できぬが、第四宮殿は整然としてをり北中央にも廊下があつて第五宮殿と連結し、その宮殿、廊下には柱の裾を巻く綠釉の柱座が多數發掘された。第五宮殿はその西にある宮殿とともに漆喰の床を存し、また坎の煙道を存した。こゝから和銅開珎が出土した。なほ禁苑の池に臨む宮殿、及び島の上に立つ八角亭址など調査し、唐三彩の斷片などを得た。内城外では數ヶ所の寺址を發掘し、壁畫斷片泥佛等を得たし、そのプランも明らかにすることができた。また渤海時代以來嚴然として今日に及んで立つてゐる有名な石燈籠も調査した。

(なほその遺跡遺物の主要なものも多數、幻燈使用にて説明されるところがあつた。)

一、宗教改革運動と大學 文學博士 石原 謙氏

中世の大學はローマ・カトリク教會の束縛の下にあつた。十五世紀イタリ・ルネサンスの人文主義の影響によつて、大學は一先づ人文主義的立場よりの改革を見たが、未だ半中世的な、スコラスティシズムと人文主義との並立を許す程度のものであつた。眞に近代的な大學は十六世紀前半に行はれたヴァイツテンベルグ大學改革に初る。

ヴァイツテンベルグ大學改革は、從來の人文主義的改革とは異

なり、宗教改革運動と平行して行はれたものであつて、その改革運動の精神は宗教改革運動の精神そのものであつた——といふのが本講演の要旨であつた。

即ち、一五〇二年創立のヴァイツェンベルグ大學は當初より人文主義的傾向が濃厚であつた。此大學に於て重きをなした者はマルテン、ルッターである。彼が宗教改革を起すや、それは彼一個の運動でなくヴァイツェンベルグ大學全體を背景とする運動となつてゐる。此ルッターの立場は同じく人文主義であると同時に、熱烈なる福音主義であつた。彼がアリストテレスを否定し従來の allegorisch な聖書研究をやめて philologisch な研究についたことはスコラステイシズムの否定であり、隨つて中世哲學大系の廢棄である。而してそれは、源泉に復れといふ人文主義の精神に通ずるものである。併しルッターの人文主義は彼の福音主義を助ける限りに於て攝取されたものである。人文主義の上に深められたこの福音主義こそルッターの宗教改革運動の精神であり、同時に一五三六年のヴァイツェンベルグ大學改革の指導精神であつた。此精神によつて、人文主義によつてはなされなかつた教會主義、スコラシズムよりの完全なる揚棄がヴァイツェンベルグ大學に於て初めて行はれ、こゝに新しい自由な大學が初めて成立したのである。爾來新設舊設の諸大學は此範例にならひ宗教改革的立場によつて改革されるに至つたのである。(約二時間に亙る博士の講演は詳細を盡し、論の結構亦之と同じくない。筆者は僅少な断片的速記に據つて本文を草した。

隨つて博士の説を誤り記せざるかをわそる。若し誤る所あらばそれは筆者の責任であつて、博士並に讀者諸氏の寛恕を乞ふ次第である。(井上智勇記)

● 藝 股 (幻燈使用) 工學博士 天沼 俊一氏

藝股は日本建築の構造部分の中時代による變化の最も明瞭に認められるもので、その多種多様なことは到底その一々に就いて詳説するを許さないが、之を然るべく分類し系統づけるならば、それら相互の間は歴史的發展或は墮落の關係を十分に跡づけることが出来る。まづ板藝股と刳抜式とに二分していへば前者は奈良時代のもは高さより奥行の方が厚いが漸次高くなり且上巾が下巾より狭きものを生じ鎌倉時代に至つて、更に高さの上より三様となり以後時代の降ると共に形がくづれ遂に江戸時代には雲板と名づけられるものになる。後者は平安時代に始まり鎌倉に入つて急速に發達し内部に種々の彫刻を入れるやうになつたが、その圖案の骨線は大體兩肩から斜に中央に向つて下つてゐる。桃山より江戸時代に入つてはその彫刻が愈々大きくなり外部の輪廓の外へはみ出て遂に上の重みを支へるといふ藝股本來の意義を忘れるやうになつた。

第二日二十四日は東方文化學院京都研究所に同所一般研究狀況書庫及び左の特別陳列品等の見學をなした。尙見學に先立つて同研究所長狩野博士より同所の使命其他に就ての説明があり考古學關係史料見學には梅原研究員、書庫見學には渡邊司書の説明があつた。

一、朝鮮平安南道大同郡漢樂浪郡時代塚墓出土明器土器類

(昭和七、八年の兩年度に朝鮮古蹟研究会主催の同古墳群調査の際梅原研究員の發掘せるものにして、當代此の種の塚墓に副葬せる明器類の性質を徵する一の資料)

- 一、貞柏里第二百十九號塚墓出土大形瓦盤(一個)、小形瓦盤(六個)、瓦七(一個)

着彩有蓋壺(一個)、着彩甕形瓦器瓦釜二個附(一具、瓦鉢(三個))

- 一、貞柏里第二百二十一號墳墓門外出土小甕棺(以上第一函)

- 一、南井里第二百二十號塚墓出土甕形瓦器(瓦甕、瓦釜附)(一具)

- 一、貞柏里第二百十九號塚墓門外發見着彩瓦盆(一個)、瓦杯(八個)

- 一、貞柏里第二百十九號塚墓出土瓦盆(一個)、耳杯(二個)

- 一、石巖里第二百六十六號塚墓出土綠釉燈台(一個)(以上第二函)

- 一、貞柏里第二百二十七號塚墓出土甕形瓦器 瓦釜 瓦甕附

(一具)、瓦壺(一個)、大形瓦杯(六個)、小形瓦杯(八個) 瓦皿(四個)(以上第三函)

- 一、貞柏里第二百二十七號塚墓出土瓦皿(一個)、瓦鉢(二個)

瓦製器臺(一個)

- 一、貞柏里第二百二十一號塚墓出土瓦壺(二個)、瓦鉢(一個)(以上第四函)

一、滿洲國內蒙古發見石器時代遺物

(昭和五年同九年に於ける水野研究員の同地方調査の際採集せる資料にして、同地史前の狀態を徵す可き好資料) 一、內蒙古錫林部爾貝子廟發見細石器並各種石器類 昭和五年十一月採集 (以上第六函)

- 一、滿洲國奉天省鐵嶺出土磨石器及土器類

- 一、滿洲國吉林省石碑嶺發見打石器及土器片 (以上第七函)

- 一、滿洲國興安北分省ドロツト發見細石器及土器片

- 一、滿洲國興安北分省ハンダガヤ發見細石器土器片及石鏡

以上昭和九年七月採集 (以上第八函)

一、支那古鏡分析資料

梅原研究員の「支那古銅器の研究」と連關して、研究所より資料を提出し、昭和五年以來京都帝國大學理學部の小松(茂)教授・山内(淑人)博士の許にて化學的調査の行はれて近く其の結果の公刊せらるゝ事となれる泰以降明代に至る各代の鏡(分析に供せるもの、四十餘面を年代順に陳列せるものなり。(以上第九・第十兩函))

第二の寫真陳列は數年來多數の貴重なる遺品を出して今や洋の東西に著聞する支那河南省洛陽附近金村の古墓出土品の優秀なる銅器・玉器類より選擇せるものなり。此の古墳出土品に就いては著者 William Charles White, Tombs of old Lo-yang (Shanghai, 1934)に於いて遺物の類聚を試みられたるも、同書には種々の重要な遺品を脱漏せり。依つて梅原研究員の蒐集せる寫真中より其の主要なるものを選び、以て金村出土品の全貌

を明にすると共に所謂秦様式の特徴の一斑を示さんとせらるものなり。是等の遺品は東京細川護立侯、灘 嘉納治兵衛氏、紐育 ウィンスロップ氏、ホストン美術博物館、華府フリア美術館、カンサス美術館、カナダ・トロント博物館、巴里盧氏等の收藏に係る。

以上の外考古學研究室には研究所に近接せる史前の遺跡並に北白川上終町にて見出されたる古寺址に於いて研究所員羽館易氏等の發見せる石器時代遺物並に古瓦の一部をも臨時に陳列せり。

特別陳列收藏圖書

- 一、後漢書九十卷增續漢志三十卷 劉宋范曄撰 唐章懷太子李賢注 續志晉司馬彪撰 梁劉昭注 宋刊本

- 一、漢書地理志補注一百三卷 清吳卓信撰 道光二十八年 涇包篋言刊本

- 一、皇朝編年備要三十卷 宋陳均撰 清白草廬鈔本 有馬玉堂圖記

- 一、三朝北盟會編二百五十卷 宋徐夢莘撰 鈔本 有潘介繁傳增湘圖記

- 一、天下郡國利病書一百二十卷 清顧炎武撰 鈔本

- 一、讀史方輿紀要一百三十卷 清顧祖禹撰 鈔本

- 一、大清一統志三百五十六卷 清乾隆九年敕撰 道光二十九年 陽湖薛子瑜活字印本

- 一、重訂漢唐地理鈔四册 原闕二册 清王葆輯 嘉慶中金谿王氏刊本

- 一、大明律例附解十六卷 明嘉靖二十九年官撰 隆慶二年 池陽秋浦杜氏象山書舍重刊本

- 一、徐興公家藏書目四卷 明徐燂撰 江陰謬氏藝風堂鈔本

- 一、咫進齋善本書目四卷 清姚元撰 鈔本

- 一、關右經籍考十一卷 清卞澣撰 刊本 有繆荃孫圖記

- 一、嘉定錢氏藝文志畧一卷增先德述開一卷 清錢師靈撰 道光二十三年序 嘉定錢氏刊本 內府刊本

- 一、西清古鑑四十卷增錢錄十六卷 清乾隆十四年敕撰 內府刊本

- 一、藤花亭鏡譜八卷 清梁廷枏撰 道光二十五年自序刊本

- 一、泉幣圖說六卷 清吳文炳吳鸞同撰 嘉慶五年涇縣吳氏香雪山莊刊本

- 一、天學初函器編 明徐光啓輯 萬曆中刊本 渾蓋通憲圖說附

- 一、聖宋景祐乾象新書殘十卷 存卷第一至第十 宋楊惟德等奉敕撰 鈔本

- 一、乾象通鑑一百卷 宋李季奉敕撰 光緒中廣雅書局校鈔本 有獨山莫氏銅井文房圖記

- 一、高僧傳十四卷 梁釋慧皎撰 宋刊藏經本

- 一、西夏文華嚴經殘五卷 存卷第六至第十 元刊本

- 一、西夏文華嚴經殘一卷 存卷第三十六 元刊本

- 一、紀錄彙編二百十六卷 明沈節甫輯 萬曆四十五年 陽羨陳子廷刊本

- 一、問經堂叢書三十八種 清孫馮翼輯 嘉慶中承德孫氏刊本

- 一、眞意堂三種 清吳志忠輯 嘉慶十六年瑣川吳氏活字印本 有繆荃孫識語震鈞圖記

- 一、獨抱廬叢刻 清陳宗彝輯 道光中金陵陳氏刊本

- 一、得月移叢書 清榮譽輯 道光中長白榮氏刊本

- 一、晁氏三先生集 宋黃汝嘉輯 嘉靖三十三年裔孫理實文堂據 慶元五年刊本 東吳重刊 有趙之謙圖記

第三日廿五日 京都市守屋孝藏氏邸に同氏所藏品の見學を行

ひ、其間本學梅原助教より展覧品に關する説明があつた。當日の展覧品は次の如くである。

古文書畫幅

- 一、伏見天皇宸筆唯識三十頌
- 一、正親町天皇女房奉書 天正五、八、廿五、理性院宛
- 一、後白河上皇院宣
- 一、豐臣秀吉自筆書狀 (文祿三)夫人杉原氏宛
- 一、高臺院豐臣秀書狀 常光院まき長老宛
- 一、雲舟筆山水圖
- 一、足利尊氏畫像 足利義詮花押
- 一、周麟贊足利尊氏愛馬圖
- 一、推古期繡佛
- 一、硬衽製半跏思惟菩薩像 六朝
- 一、唐三彩貼華文壺 (重要美術品)

藥浪郡遺蹟出土品

- 一、玉 勝 (重要美術品)
- 一、瑠璃 櫛 (同 上)
- 一、鳩形杖頭金具 (同 上)
- 一、怪獸草華文銅盤 (同 上)
- 一、漆 杯 (同 上)
- 一、銅製双耳壺附銅七 (同 上)
- 一、彩畫漆盤 貳個
- 一、帶鈎 一、銀釧 一、五銖錢 一、耳杯耳 一、銅針、鐵針

- 一、瓦釜 一、瓦杯 一、瓦壺 一、銅製轆轤 一、銅鏡
- 南朝鮮出土品
- 一、金耳飾 一、金環類 一、玉類 一、銀頭大刀 一、金銅冠 一、金銅冠前立金具 一、金銅鞍金具 一、三環鈴
- 一、馬鐸 一、陶埴、埴、樂器
- 日本各地出土品
- 一、大和國生駒郡富雄村大和田古墳出土琴柱形石製品 一、管
- 一、石製刀子 一、石製斧 一、石製鑿 一、鐵形石 一、石製合子 一、銅製劍形品
- 一、大和國磯城郡多武峯倉梯岡陵出土石製枕形品 一、異形石製品
- 一、上野國箕輪町天宮古墳銅鈴 一、鈴杏葉 一、鐵地銅張轡
- 一、鐵製鎌、斧頭槌製品 一、掛甲(鐵小札草威胴丸式)
- 一、上野國多野郡美九里村古墳出土鐵製壺蓋 壹對
- 一、上野地方出土銚劍 一、鈴杏葉 一、銅鈴 一、馬鐸 一、金銅並銅製鈴 一、三環鈴 一、鈴附劍形品 一、勾玉、管
- 玉、切子玉、三輪玉、其他
- 一、上野地方出土銀頭大刀 壹口
- 一、同 頭槌大刀 壹口
- 一、同 圭頭大刀 壹口
- 一、同 圓頭大刀 壹口
- 一、日向國兒湯郡西部原古墳出土金銅馬具、雲珠、杏葉
- 一、同 金銅鞍覆輪

一、同 上江村持田古墳出土金銅馬具、轆、雲珠、杏葉、其他

支那古鏡類

支那戰國時代より唐末に至る各時代の遺品約三百面、朝鮮樂浪郡時代の古墳出土鏡約二十五面本邦上代古墳發見の支那鏡並に其の仿製品約百五十面より成る一大蒐集品なり。其の支那鏡は居攝元年以降唐初に至る年號鏡約三十面、支那最古の鏡(所謂秦鏡)の諸形式、漢代に盛行せる方格規矩四神鏡のあらゆる形式を網羅し又唐代の各種の精巧なる遺品を含み、本邦出土品にありては大和、備中、豊前等の出土品に見るべきもの多く、こゝに一々の目錄を挙げ難し。今中に就いて階上の周圍のケースの陳列外に特別に展觀せる主要なるもの十數面のみを次に録す。

- 一、居攝元年内行花紋鏡
- 一、永壽二年獸首鏡其他年號鏡
- 一、新獲の所謂秦鏡
- 一、漢金錯華文鐵鏡
- 一、嵌入玻璃小鏡
- 一、唐貼銀鍍金狻猊鏡
- 一、唐平脫文鏡
- 一、唐飛天迦陵嚩伽鏡
- 一、螺鈿鏡 等

最後に右見學を本會の爲に快諾せられ且特別の便宜を與へられた東方文化學院京都研究所並びに守屋孝藏氏に對し深厚の謝

意を表する。

●故内藤博士追悼會

十一月二十三日(新嘗祭日)市内家政高等女學校に於て受業生一同の主催にて故内藤博士の追悼會を營む。午後九時半より大島徹水師の導師にて法要あり、式後西田直二郎博士、小川琢治博士、黒板勝美博士、狩野直喜博士の追悼談に移り、引續き午後、故博士の寫眞、著書、原稿、遺墨、遺藏書、遺藏品の展觀あり。又昨年滿洲國郷總理が恭仁山莊を訪問せる際の活動寫眞を映寫して故人の遺徳を偲べり。展覽せる遺愛品の主なるもの左の如し。

遺藏書

唐寫本說文木部殘卷	一	卷
北宋槧史記集解	十一	冊
宋板毛詩正義	十七	冊
舊鈔本古文孝經	一	卷
北宋小字本說文解字殘本	四	冊
南宋板史記集解	十二	冊
吐魯番出土論語鄭注殘本	一	卷
舊鈔本老子道經	一	卷
舊鈔本周易正義	七	冊
永樂大典零本靈臺通紀	一	冊
大明集禮	三十六	冊

鈔本蒙文元朝秘史	文廷式所贈	六册
鈔本元典章		二十四册
鈔本清三朝實錄		一部
宋板妙法蓮華經	狩谷披齋舊藏	一摺
敦煌本大乘起信論殘卷	西園寺公所贈	一卷
敦煌本咒魅經	七佛解誓文招魂經共卷	一卷
碧巖錄	瑞龍寺板	十册
詩法源流	五山板	一册
蒙古遊牧記	張穆手稿本何秋濤手訂	四册
章實齋遺書	章學誠手稿本	八册
吉田篁墩手校	左氏傳正義	二十册
山梨稻川手稿本		一卷
讀書指南	市野迷庵手稿本	一册
讀書指南	澁江抽齋淨寫本	一册
玄語	三浦梅園手稿本	二册
困學紀聞	湖南先生書入本	十二册

遺藏品

顧炎武書幅		一軸
康熙帝宸翰		一軸
乾隆帝宸翰		一軸
錢大昕書幅		一軸
包世臣書幅		一軸
章學誠書幅		一軸

宋畫孔子及顏淵閔子騫仲弓畫像

惲南田墨菊

錢叔美采筆山水

改七鄰美人圖

趙之謙花卉

松崎懋堂書幅

伊藤蘭嶋墨蘭並贊

寂巖和尚書幅

宋斷端硯

錢竹汀遺愛竹節硯

西洋史讀書會

例會 昭和九年度第三回例會を九月二十九日午後六時半より樂友會館第五號室に於て開催、左記二君の讀書紹介ありて後散會。出席者時野谷、原兩教授、鈴木、岡島兩講師を初め二十五名。

1. A. V. Harnack; Mission u. Ausbreitung des

Christentums. 二回生 川島 岩雄君

1. Hearnshaw; Democracy 二回生 花村 文雄君

大會 昨秋十月開催した本會再興十五週年記念大會豫想外の盛況と、會員諸兄の大會毎年開催の熱誠なる希望とに鑑み、十月六日午後一時より樂友會館講堂に於て第二回大會を開催の處、時野谷、原兩教授、鈴木、岡島兩講師を初め出席する者八十有

余名に上り昨年よりも更に盛會を極めた。左記諸氏の研究發表ありて講演會を終了、後會員一同晚餐を共にし、引續き懇話會に移つたが、時野谷先生司會の下に江坂長四郎、高橋金也、佐々木龍作、岩根智昭、吉原好人、竹村越三、岡島誠太郎、中原與茂九郎、稻葉常楠、菅原憲の諸氏各ユーモアに富んだ懐古談、所感を述べられ、一同本會の隆盛を祈りつ、散會したのは十時前であつた。尙講演會の司會者には岡島、菅原兩氏を煩はした。

講演會

- 一、開會之辭 文學博士 時野谷常三郎先生
- 一、十六世紀フランス農村の研究 文學士 森崎 周一氏
- 一、Ritterorden の經濟的發展 文學士 二宮 善夫氏
- 一、“Art of War”を通じて觀たる戰術家としてのマキアヴェリに就て 文學士 柴山 英一氏
- 一、希臘人の植民觀 農學士 若木 禮氏
- 一、古代ローマ史研究法の近況 文學士 井上 智勇氏
- 一、マキアヴェリの歴史觀に對する一考察 文學士 高橋 金也氏
- 一、騎士の時代とその精神 文學士 鈴木 成高氏
- 一、ビスマルク後の獨逸外交の不統一に就て 文學士 稻葉 常楠氏
- 一、フーゴ・グロチウスと其の著「戰爭と平和の法」 文學士 佐々木 忍氏
- 一、古代バビロニアに於ける賃労働制度と賃銀

文學士 中原與茂九郎氏
文學博士 原 隨園先生

一、開會之辭
例會 第四回例會を十一月十五日午後六時より樂友會館第五號室に於て開催、左記二つの研究發表並に證書紹介ありて後散會。出席者時野谷教授岡島講師を初め二十七名。

一、啓蒙期に於ける社會契約說 文學士 江坂長四郎氏
一、Gloze; Ancient Greece at Work. 二回生 佐々 久君

讀史會

例會 十月二日樂友會館にて、西田教授、藤講師以下廿四名出席の下に開催、左の如く研究發表があつて十時散會。

一、中世初期に於ける政治觀の一端

一、佗びの生活 三回生 大貫 俊雄氏
文學士 西堀 一三氏

例會 十一月十五日樂友會館にて、午後七時より開催、左の如く研究發表あつて十一時散會、出席者西田教授以下十八名。

一、日本上代の信仰に就て 三回生 湯淺 敏郎氏
一、本居宣長 三回生 油 忠雄氏

一、眞宗繪系圖雜攷 文學士 向井 芳彦氏
一、近世に於ける町人家憲の成立 文學士 有働 研造氏

大會

十一月廿四日(土)午後一時半より樂友會館講堂にて開催、多

數會員出席の下に西田教授の開會の辭があつて、左の如き諸氏の研究發表があり、午後五時四十分散會した。

一、維新前後に於ける切支丹に關する新史料

文學士 禰津 正志氏

慶應三年前後の切支丹に關する史料を大體從來の研究と異り列國の政府が發行した公使領事への本國政府からの訓令集の中に於るもの、公使領事の本國への通信と云ふものより紹介された。

慶應三年佛宣教師プチャーチンの長崎に於ける天主教の布教それに對する幕府の彈壓より生ずる列國の干渉を外國文書より説明し、日本政府の切支丹禁制の宣言を列國が協同して撤回せしめしとした事などを説明された。要するに外國の本心は政治と宗教とは別問題との立場に立つて働き、宗教は政治と異り、政治的權力で宗教を壓迫しても仕様がなるとの列國の通念から、日本政府の切支丹排斥を中止させんとしたものであるが、歐洲列國が宗教問題と政治問題を區別する事は、日本政府と本國との宗教の見方が根本に於て異つてゐると認めてゐたと云ふ事を外國文書を引用して説明された。

(三輪)

一、歴史地理學の性質に就いて

文學士 武藤 誠氏

出來事として歴史を成立させるには土地が必要である。土地と云ふ要素を除いては、歴史事象の具體的理解は出來ない。

故に吾人は歴史の認識に地理を導き入れ度い。現在の郷土史に就いて云へば、郷土史はその正にあるべき形で發展せずして、郷土史と云ふべきものになつてゐるし、地理的歴史觀も正しくないと考へられる。所謂歴史地理學の概念は曖昧であるが、歴史地理學はたとへ歴史の事が問題にされても、何處までも地理學でなければならぬ。(村松)

一、大勢三轉考に就いて

文學士 柏倉 亮吉氏

大勢三轉考を史學史的に意義づけるよりも、寧ろ著者伊達千廣の遍述態度を見ようとし、殊にその史觀の實踐的意義を問題とした。曰く、千廣の史觀は一見命根説を眞向に出してゐる様であるが、それによつて徹頭徹尾せられてはゐない、却つてその内に「人の心」の多く關與し得る事を認めてゐるのであり、なほ注意すべきは、この「人の心」こそ歴史に於て永遠性をもつべきものであるとする考へのある事である。この故に千廣が歴史に於て最も問題とする處は當然人間性の高さと云ふ事であらねばならなかつた。従つて彼の史觀の實踐的意義は彼の先輩諸國學者の如き古代精神の宣揚と云ふ事に於てではなく、更に立場を廣くして高き人間性の獲得と云ふ事に於て見出されるであらう。而してこの自由なる考察の中には彼の生涯の前後兩半生の對照的な明暗二相を経て得られたる深き觀照を示してゐるであらうと思ふ。(三輪)

一、理想主義史觀と合目的論

文學士 徳重 淺吉氏

先づ理想主義と合目的論とに就き述べ、ヘーゲルは人間の理

性を極端に信賴して強調し、かかる考へ方が歴史にも現はれたが、此れは神を全智全能とする基督教的教育を受けたヘーゲルの缺點であると思ふ。この點釋迦の考へ方は正しい。吾人は非基督教的な立場からこの缺點を訂正せねばならないとされた。(村松)

一、近世史上に於ける古きもの

文學士 山根徳太郎氏

近世史上でも幾つかは拾ひ上げる事が出来る様に、つい先頃まで實在の人物が神様になる事は面白い。秀吉は死ぬとすぐ神様になつた、これは注意すべく驚くべき事である。家康にしても同様である。とにかく偉大な人が死ぬと直に神様になる事は確かに近世初頭にあつた思想でこれは上古の思想と相通するものがある。

この點古代精神の再生であり、ルネッサンスと云へると論じ鎌足、道眞、聖徳太子、弘法大師など人格化を説明して秀吉が突如として神になつた理解を助け、文化の發展は順序に進むのが原則で、突然として變ることは文化に於ては考へられぬ人が神になるのも中世からの引き續きであると考へる。尙その間には近世は近世的なものをもつてゐると考へる。と。

一、歴史地理學上より見たる但馬圓山川の流域

文學士 魚澄惣五郎氏

現在の但馬の地勢その他を説明され、天目槍傳説と古代に於

ける交通路、文化の中心に就き、又粟野神社、兵主神社、八幡宮の祭神やその數より推定すべく考ふべき事が多いと述べられた。(村松)

●地理學教室談話會大會

昨年度の地理學談話會大會は大毎會館に於て公開講演として行はれたが、本年度は京大俱樂部、其の他の學會が催され、先輩諸兄の多數來學されるにより、會員相互の研究發表を目的として、十一月二十四日に學内講演會を開催することに決定した當日は樂友會館に於て會員一同午餐會を共にし、引續き午後二時より陳列館第二教室に於て講演會に移り、午後五時半開會した。小川名譽教授、小牧助一、中野、田中、藤田氏等を始め先輩學生諸兄等五十二名の出席を見、批評質問が行はれ、從來になき盛會であつた。講演會の演題及び講演者左の如し。

一、シユミットの經濟地理學に就て 別校 篤彦氏

一、飛驒の白川 島 之夫氏

一、大垣市を中心とせる纖維工業の立地論的研究 田中 秀作氏

一、マレー半島一瞥 秋山 垣士氏

一、感想談 瀧本 貞一氏

一、商業地理學の一問題 小川琢治先生

一、三河地方に於ける露人の生活 宮川 善造氏

田中 博氏

一、民族移動と順應に就て 田中 秀作氏

●支那學會

九月例會 九月廿九日(土)午後三時、文學部第一演習室に於て開催、左の講演があつた。出席者狩野博士はじめ三十三名。

一、翁註困學紀聞 平岡 武夫氏

渡儀遺民自誌(四明文獻集收又附張譜後)、宋史儒林傳錢大昕輯
 王深寧先生年譜(潛研堂全集收)陳僮張恕同輯王深寧先生年譜
 (附深寧先生文鈔後)張大昌輯深寧先生年譜 附光緒十六年浙
 江書局刊 玉海附刻後(以上王深先生傳資料)慶元路本(民國十五年江安傅氏藏園用家藏元本景印)黑口本萬曆刊本(萬曆卅一年莆田吳猷台重刊本寬文元年洛陽中野道也重刊本)單箋本(閩校本清園若璋校康熙三十七年閩氏家刊本乾隆三年祁門馬璠氏叢書樓刊本同治九年揚州書局重刊本)二箋本(何校本清何焯校桐川汪氏桐華書熟刊本)三箋本(乾隆七年清全祖望校並輯閩何二氏校注)五家注本(屠校三箋本・清屠繼序校並輯閩若璋何焯全祖望方榮如程瑤田等五氏校注嘉慶十二年金閩友益齋刊本)七箋本(萬氏集證本・清萬希槐集證並輯五家注及錢大昕屠繼序校注嘉慶十八年胡氏山壽齋刊本)翁注本(清翁之圻撰道光五年餘姚翁氏守福堂刊本)(以上困學紀聞刊行本)

に就て説明があつた。

一、支那語源研究

高畑彦次郎氏

支那文字の研究に於ては形に於てのみ文字の古意を定むるは早斷に近く此所に音の研究の必要あり。支那の音の研究に於ては「主方言」を得んとして之に混淆せる「副方言」を排除しなくてはならない。之は難事であるが文字研究の第二要素として必ずなされなくてはならぬ。又之にのみ溺入すべきでなく、第三の要素として義の研究が必要である。然るに「音の法則」は成立し得るが、「意味の法則」は常に個人の心理的動向に依つて決定せられる故、困難ではある。然し支那文字に於ては義を示さんとすれば形に據らざる可からず、此所に便宜あり例せば「希」には希疏希求希薄の義あり「希」は爰即、岡に从ひ、巾に从ふ、依つて之の原義は「アラキ目の布」の意なり、然し必ずしも原義に合すもののみならず、此所に假借義を考ふる要あり此の假借義を決定するには支那語に止まらなく廣く、印度支那語にまで手を伸ばさなくてはならない。

十月例會 十月廿七日(土)午後三時より學生集會所乾室に於て左の講演あり、小川新城、小島博士を始とし出席者三十八名であつた。

一、荀子勸學篇に就きて 木村 英一氏

吾人荀子を讀む時、一篇に於て、各節が断片的にして、その間何等の聯關を認め得ず。その解釋に苦しむものあり。しかも全體を通讀する時、何を云ふんとして居るかは理解し得る。その最も著しきもの勸學篇にあり。と幾多例を勸學篇に取りて通讀され、要之、此の断片性は、その著作に當り多くの古書を引

用、云は、鉄と糊のみによる著作であるによるのであらう。支那古代の著作に於ては斯るもの多く、荀子勸學篇はその著例であり、其所に斯るギャップが生じたのであると見て間違だらうか。云々

一、支那旅行談

能田 忠亮氏 森 鹿三氏
塚本 善隆氏 長廣 敏雄氏
小川 茂樹氏 (講演順)

能田氏今秋の東方文化研究所員五名の北平研究旅行の行程課題を示し、今日はその中房山に就いて諸氏の談話ある由述べられ更に北平觀象台に關し、寫眞書物を以て述べ、森氏房山雲居寺の位置を地圖により示され、その景觀に就いての説明あり。塚本氏數十枚の拓本を示し隋朝より此所に起れる石刻一切經に就いて説明あり、此事業の起れる原因は末法思想にある。尙當時佛教盛なりしによるは勿論にして、それには梁の武帝抑佛の反動が考へられる。其石經の外形式其著作者に就て話さる。長廣氏雲居寺特にその東塔の美術的考古學的調査に就いて、調査に時間なく最も重要な一階のみを調べられし事を述べ、その説明があつた。講演時間不足の爲小川氏の談話は中止となつたが同氏撮影の幾多の寫眞は會場を賑はした。

十一月例会 都合に依り中止

●東洋史談話會

例会 昭和九年九月二十二日樂友會館第六號室に於いて午後

六時半開會 前日は近畿地方を襲つた未曾有の暴風の日であつたが、參會者は宮崎講師を始め十九名で盛會であつた。

一、上野帝國圖書館所藏

明の起居注を紹介す 今西 春秋氏

歷代正史編纂の材料として起居注、時政記、日歷等があり、其等が集められて實錄となり更に正史に編纂された譯であるが、明代に於ては状態の異つた事、洪武初年廢せられた起居注が萬曆三年に復活せられた事を前提として本題に及び、皇明實錄と題する上野圖書館本は大部の起居注を含むものであり、中に脱漏はあるも萬曆二年正月より天啓元年六月に至るものである事が確認された事は明の修史及び明末史の究明に資する所大であるとし、又内閣文庫の明實錄にもそれに續く起居注のある事や、起居注の體裁或ひは現存する諸種實錄との比較等に就き詳細に互つて述べられた。

一、次に東洋史出身、東方文化學院京都研究所研究員であつた松浦嘉三郎氏より今般滿洲國に赴任されるに當り挨拶に代へて次の如き講演があつた。

漢書百官志に見える三公九卿の制度は今文家の考へて以て整頓せられたものであつて、三公は相對立する官でもなく又九卿は官名ではなくて爵名である。又六部の制度は魏の時に王肅が用ひられその古文學說によつて採用せられたものである。唐の六典は此等今古文兩系統の官を網羅したものであつて、六部と九寺の間には重複せる管轄事項が多く永く後世の冗官問題の基

因をなした。

尙松浦氏を中心に種々の座談に花が咲いて夜の更けるのを知らなかつた。十一時散會。

例會 昭和九年十一月五日學生集會所乾室に於て午後六時半開會、京大來講中の東大助教加藤博士よりの左の講演あり、那波助教授宮崎講師を始め參會者二十一名。

唐宋時代の金銀地金の形式について 加藤 繁博士

地金の形式として先づあぐべきは錠で、之は錠とも言はれ其文字の示す如く長方形の直な地金である。其實物は明治七年奈良興福寺から發掘された物以外には知られなかつたが、唐浙江西道觀察使崔愷由の端午の進奉銀が昭和四年末北平の骨董商尊古齋の手より我が三井源右衛門氏の藏に歸した。崔愷由の傳は兩唐書にも見え、浙江西道觀察使であつたのは大中七八九年の頃である。元代の法馬形の金銀地金の事は東涯の蓋簪錄にも見えるが、現存の實物は南宋の理宗寶慶三年に遠州通判任隆祖の上つた大禮進奉銀が天津の方若氏に、同く南宋の物と思はれる銀重伍拾兩、行人周莊、庫子孟興とある地金を羅振玉氏は藏して居る。尙自分の所藏する距離出土と傳ふる碎銀は庫銀口示とあり恐らく北宋の慶祐皇祐等に當るものではないか、之等法馬形の地金も錠と呼ばれたに違ひない。牌に就いて言へば共に金牌であるが方若氏藏の物には界内周二郎と刻しスタンプで劉家記とあり、自分の珍藏する物には内部三郎、劉記と刻し、何れも一欠餘である。周二郎三郎は金銀匠の名、劉家記劉記は金銀

鋪の名であらう。内部界内とは開封府の界身の事で東京夢華錄に金銀絲帛交易の所とあり續資治通鑑長編元祐二年十一月の條に界南頭とある所である。夷堅丙志に小金牌重一錢とあるのは此等の重量と一致する。葉子金は奈良元興寺の五重塔址の土臺石の下から發掘されたものが存し四分して一斤は失はれてゐるさて金銀地金は當時社會に重要な働きを爲したのであつて富貴人の玩弄物として一般と無關係にあつたのではない。價値の移轉貯藏を便利にし經濟活動を敍活にして人々を刺戟したのである。

以上多數の寫眞を示して極めて興味深く説明せられた。

例會 昭和九年十一月二十六日樂友會館第一號室に於て午後六時半開會參會者二十三名。

一、宋代の土地問題 三生 北山 康夫氏

宋代一般民田は兩稅法施行後所有者は官に地租を、耕作者は土地所有者に地代を納めることとなり、地租地代とは明確に分離し、土地私有權の成立を見た、公田に於ても官と耕作者の關係は民間の土地所有者と耕作者との關係と同一で租税も地代に外ならなかつた。この私有化した土地を基礎に農民の階級分化を考察するに、民戸は役法上土地・財産の所有額に従つて五等に分等され、第五等戸二十畝以下、第四等戸五十畝内外、第三等戸は百畝内外で、第一第二等戸は一頃以上百頃に及ぶものがあつた。當時一戸の耕作面積は大體百畝内外であつたから、第三等戸は純自作農、第四第五等戸は自作兼小作農第一第二等

戸は地主で従つて當時第三等戸が中等戸それ以上が上戸、それ以下が下戸と呼ばれたのも謂あり。この外全然土地を有しない純小作農たる客戸があり合せて六等に分等されてゐた譯である。客戸は大體全體の三分一、下戸は三分一或はそれ以上を占め、殘りの三分一、或はそれ以下が中等戸と上戸であつたと考へらる。

仁宗の頃には形勢戸の有する土地が天下の半にも達せんとし上戸の驚くべき土地集中と下戸客戸の著しい土地窮乏を見るのである。

上戸客戸及下戸との關係は、客戸は主戸より土地・家屋・牛種・灌漑の設備等生産手段生活資料を仰ぎ、主戸は客戸より收穫の半に達する小作料と徭役勞働を得、兩者相資し密接不離の關係を結び、客戸は殆ど稅役から免がれると共に國家の保護からも見放され、永久不變の高率地代に縛られ國家の政治と全く無關係な境遇におかれた。上戸は官僚即士大夫發生の地盤で國家權力と密接に結びついてゐた。従つて天下田畝の十分七に達する土地稅ありながら常にその檢田が不徹底に終り、乾興元年政和年間發布の限田法は單に官戸の科差を免ぜられる土地の最高額を規定するのみで、眞の限田法でなく微溫的なものであつたに拘はらず施行し得ず、國家は益々甚しくなる上戸の土地集中と中等戸、下戸の客戸への没落を如何ともし得なかつたのである。

一、北魏刑官考

内田 吟風氏

北魏の官制は魏書官氏志の不備により極めて知り難く刑官の如きも諸紀傳中の刑獄事例より之を推知せねばならぬ。初世には四部大人の法文記錄牢獄無き原始的口頭即決裁判行はれ、其後孝文迄は三部坐大官の裁判あり、其狀況も略推知し得る。

孝文以後(漢代法精神による)尙書廷尉の裁判制度確立し、廷尉寺は廷尉卿少卿正監評丞司直獄丞律博士其他構成し(一)御史臺より廻附の罪案を照律斷罪し(二)御史を糾罪し、(三)尙書劾奏事件を審判し(四)詔により直ちに犯入の檢訊斷罪をなし(五)稀に自發的に犯人の檢舉斷罪をなしたる事實を認め得る。之等は有官位者に對するを原則とした。

尙書省には都官比部三公の法曹あれど單獨刑獄を掌らず令僕統率の合議體としての活躍を見た。(一)廷尉州縣獄犯人側の控訴再審(二)同上獄の一般監督代行(三)同上獄讞疑裁決(四)高官位犯人の檢訊彈劾其他を行つた事例最多く、尙書左丞は八座(八座の組織も他時代と稍異なるべし)外にありて其執法を監視した。北魏の廷尉尙書は相互の司法上の權限管轄等の上に他時代と相違あり、之刑部尙書發展の過渡期に當れる爲である。又地方裁判は専ら地方長官掌れる爲京畿庶獄も亦牧尹令之に當り他時代の如き廷尉の關預を見ない。之に注意すべきである。

尙廷尉尙書の審判も天子之が最後の斷決を爲すを原則とし親く録囚し公車登聞鼓等の設あり天子が最高審判機關の地位を去らざる北魏も亦歷朝異らずと認めらる云々、

尙御史、中書門下等の司法關預俟職六謁官其他に就ては時間の都合上多く之を省略された。

● 東方文化學院京都研究所四週年記念講演會

十一月十七日(土曜)午後二時より東方文化學院京都研究所に於て同所開所四週年記念講演會を催され次の講演あり。

一、佛教史料としての「宋會要」と「金刻大藏經」

塚本 善隆氏

昭和八年夏、山西省長城縣に於て金刻大藏經が発見せられ、本年、本所研究員塚本善隆氏は北平滞在中、北平圖書館に將來されたるその一部を目賭するを得、又二三複製出版せられたるものもあるが、こは從來記録の上に現れざる藏經にして、卷子本の形をとり、卷頭に精密なる繡像あり。而して其中には他の藏經になき大唐開元釋教廣品歷章、大中祥符法寶錄、天聖釋教總錄、景祐新修法寶錄の如き書目類あり。就中、大中祥符法寶錄は漢譯の原典が或は于闐より、或は龜茲より、或は梵文よりと明記せられあるを以て、之により西域に如何なる宗派が分布したるかを窺知するを得。又宋會要是徐松が永樂大典より抄出し、劉承幹が編訂せるもの何れも現今北平にあり、その中の釋教の部は、之によりて在來の佛祖統記などの史傳の誤を正す可き材料となるもの尠からず、又兩京諸路の道士女冠僧尼の數の統計を掲げたるも當時の戸口數と比較して、佛教流行の状態を知る可き重要な資料たり。

一、分野説と古代支那人の信仰 小島 祐馬氏

Maspero は Bezold, Jastrow 等の説を紹介して分野説は西方より傳來せるものと述べたるが、分野説は古代支那人の信仰より自然に發達せり。支那に於ける天の崇拜は祖先崇拜より來り、祖先の靈が天に上れるを上帝と云ひしにて、それより天上のある星を自己の祖先として崇拜せり。故に辰は商星となり、參は晉星となる。後に至り天上の十二宮を地上の各國に分配せしが、既に古來より定まれる分野あるが故に天上の位置と地上の位置とが相應せずして、不手際なる分野の配置が行はれ、之が説明の爲に牽強附會の説も生ずるに至れり。

講演終了後、長廣敏雄氏が本年夏北支那に於て十六ミリに收めたる、研究所派遣の旅行團の行動を映寫す。聽講者堂に溢れて盛會なりき。

● 民俗學會

十月二十九日於樂友會館

柳田博士を中心に、西田教授柴田助手等極めて多數の先輩並に同窓の出席裡に開かれた。まづ柳田博士より山村調査の研究の方法並に實際についての感想をのべられ、ついで河本先輩より山村調査中の實際的體驗について話があり、愈々座談會にうつた。地名の發生、滿鮮地方の土俗田舎に於る妖怪變化についての傳説等について、次に話題が續けられ時の移るを知らなかつた。

次いで柴田助手より左記神社の神地田樂についての解説あり

高倉神社(京都府何鹿郡吉美村字高倉)

深田部神社(同 竹野郡彌榮村字黒部)

熊野神社(同 加佐郡河守村字北原)

那智神社(紀州熊野)

猶ほ此の解説後十六ミリの映寫あり神地田樂の實際を見る事ができ、古典的土俗的氣分にひたり宵のふけゆくを知らなかつた次で三宅宗悦氏より九南十島の考古學的土俗學的映畫の提供あり南國の情緒にひかれ茲に民俗學會は盛會裡に閉された。

●雪野寺趾調査

滋賀縣蒲生郡苗村安吉山麓の雪野寺趾は、既に數年前より、石田茂作、水谷、木村捷三郎等諸氏によつて塑像出土のことを注意せられて來たが、昨夏以來、滋賀縣史蹟調査會の事業として日本古文化研究所の後援により、調査の歩を進められつゝある。柏倉同所委員長として事に當り、その第一回發掘を八月前半に、第二回發掘を九月後半に行ひ、その結果、一堂(塔)趾の大半と一小遺趾とを露出せしめ得た。出土品は塑像顔面部並に身體各部の破片風鐸完形二回を尤なるものとし、數種の瓦當、礎石、金具壁面等夥多に達する。調査はなほ繼續せられる筈であるが、現在までの出土品に就いてみるも地に埋もれ來つた藝術品の優秀さに對する驚嘆と共に、また塑像の製法、塑像配置の性質瓦當紋様と近江文化等多くの問題が之に潜めらるゝことを思ふのである。

●四天王寺五重塔々下の發掘

去る九月二十一日の未曾有の風害にて、五重塔と仁王門が倒壊し、金堂が傾斜したといふ悲しむべき出來事から、四天王寺の再調査の機會が生れて來た。傾斜した金堂の引き起し作業のため支柱を金堂裏に施した際、四天王寺創建當初のものと推定される古瓦が多數出土し、堂内からは文化年間の建立當時の經石が之亦頗る多く掘り出された。また、倒壊した五重塔基壇の整理中、塔心礎の舍利穴から佛舍利六粒を納めた舍利塔が発見された。これらのことが一般の注意と興味とを喚び起して居たが、いよ／＼十一月二十九日から十二月二日までの四日間に亘つて、大阪府廳と四天王寺との共同の形で、五重塔再建のための基礎調査の意味で塔下の發掘を行つた。この發掘には、四天王寺五重塔再建の事に當られてゐる京都帝國大學教授天沼俊一氏、大阪府史蹟調査委員魚澄惣五郎氏、池田久吉氏、木村武夫氏等が參加した。心礎(花崗岩は一見文化の時のものと思はれる中央に舍利穴を設けたものであるが、四天柱礎、花崗岩は火に罹つてゐて、圓形の淺く凹んだ柱座を設へた少しく時代の古いものである。心礎を除けると、その下には四箇の心礎の臺石(花崗岩)に取圍れて、中央に二箇の凝灰岩様の安山岩をくり抜いて出來た徑二尺七寸、深サ三尺一寸餘の井戸様の凹所があり、その中に九百に近い素燒の小佛像と百に近い木像が充満してゐた。素燒のものは釋迦座像で頭像部と胴部と臺座は離れ

に難然と語り臺座共四寸五分の小像で中に光背の支へをつけたものがある。その中に珍らしく一軀だけ地藏の小立像があつた。木像は聖觀音、藥師如來の立像で大小二種あつて、大は八寸あまり腐朽して略完全な形を残すものは一軀に過ぎないが、都合五軀が上部にて中央と四方に置かれてゐたらしい。光背、臺座などの破片も見出された。小は三寸餘底部に集つてゐた。雜然たる中にも何等かの形式がある様に思はれる。他に内部から位牌の破片等も發見された。何れも文化建立時に供養のため入れたものに違ひない。さて井戸様のもの、底部には不整の長方形の底があり、更に掘り下げると一尺餘で眞砂に包まれた一箇の自然石、また尺餘で三箇の自然石が中央を空けて圍むやうに置かれ、その下に更に又三箇、五箇、五箇以上といふ風に次第に廣くなつて五段に置かれ、最後に花崗の大きな一枚石にまで達した。この頃になると水も湧き出で、更に大規模の發掘をしなければ作業も困難であるから一先づ中止した。この大石は表面平にされてゐて、何の造構もないことが分つただけで、その大きさも不明であるが徑六尺以上はあるらしい。

而してこの表面は心礎の表面から十二尺下である。なほ前記井戸様のもの、底部邊から最下の大石にかけて、幅一尺二寸餘の木炭の層が内徑三尺五寸餘の圓筒狀に埋まり如上の造構を包んでゐたことが注意された。以上が塔下の構造であるが、塔を是迄發掘した例もなく且木炭で圍んだのは、初めて見るものであり、塔下の構造の實際は分つたが、さてかゝる構造が何故な

れたか「木炭層を如何考へるか、時代はいつか、等々については輕々しく判断を下すことが出来ない。これが適切な解決は、この種の發掘が二三行はれるまで延ばされるかも知れない。この發掘の際、凝灰岩片が所々に混つて可成り下からも見出されたから、最下の大石を除いた部分は創建當時のものでないことだけは確からしい。瓦は一枚も出なかつた。時期をみて、引きつゞいて發掘が行はれ、他に中門趾、金堂附近にまで及ぶことであらうし、さすれば今少しくは明になるであらう。(岸本準二)

●京都市北白川石器時代遺跡

本年四月末、京都市左京區北白川小倉町において羽館易氏が發見した縄文土器の遺跡は、その後、同氏の獨力發掘するところであつたが、近畿に稀な豊富な遺跡であることが漸く認められたので、遂に九月六日より十二日まで京都府の史蹟調査として發掘が試みられた。南に傾斜した、遺跡で、北では二三尺で包含層は終つたが、南では五六尺に及び、その上部には花崗岩の崩壊した白砂の一層あり、その上に新しい土器(視部と赤色素焼土器)の層があつた。下部の包含層は全部縄文土器のみで、彌生式土器と認められるものはない。精巧な爪形文及び羽狀縄文の國府式土器旺盛で條痕のある土器片も若干あるが、條痕は淺い。竹管による細い凸帶文の大歳山式縄文土器もかなり多い。それから、沈文、磨消し文の縄文土器あり、またやゝ曲線的な圖柄もあり、無文のものもあり、これらに焼成もかなり相

異してゐる。注口部破片も二三あり、近畿における縄文土器の各形式を網羅してゐる。殊に從來近畿において知られなかつた彩文土器の發見は多大の興味を以つてその歸屬に注意されてゐる。石斧（断面橢圓形、三味線胴形）、石匙（三角形及び橢圓形）、石錐、石鏃（三角形及び逆刺のある扁平無柄式、甲の高い形式等）、錘石等もかなり出土し、玃狀耳飾の一片があつた。

十月二十八日から三十日にかけて、これより北方約五丁の場所にて爐址の發見があり、また縄文土器の若干が發掘せられた。これらば前遺跡のものとはや、趣を異にし、厚手や、粗糞、刻文のある種類であつた。

●京都市北白川上終町廢寺址

京都市北白川上終町の區劃整理中發見され、最初岩根智證、羽館易兩氏によつて報ぜられたが、遂に十一月四日より十日にかけ京都府の史蹟調査として、その一部基壇のある堂址が發掘調査された。南北七十五尺五寸、東西百十九尺の基壇で、地覆は二段の栗石で、その上に平瓦を平積に數十枚を重ねて壇を作つたもので、前後に栗石の石階があつたが、礎石と認められるものはなかつた。瓦は單瓣のもの外周に蓮瓣のある複瓣の圓瓦、鋸齒文帶、連珠文帶のある唐草の平瓦は白鳳、奈良前期の創立を思はず。平安京大極殿の唐草瓦もあり、平安朝頃の蓮瓣の瓦もある。また磁器破片を若干發掘した。これより西二三丁に互

つて同様な瓦やまた鴟尾断片が採集されまた線出しのある礎石も一個發見されてゐるが、寺全體のプランはなほこれを詳にしない。（水野記）

●慶州古墳の發掘

昭和九年九月十九日から十一月九日に互つて、慶州邑南郊の皇南里皇吾里古墳群中の第十四號墳を發掘した。高さ二米半、徑十五米の圓形の墳體である。内部は東西に横つてそれ／＼福櫛などもなほ主櫛二が發見されたが、その櫛の周壁及び上部には石塊が累積せられてゐた。その出土品の主なるものは金製耳飾二對、勾玉付瑠璃玉三條連繫の頸飾、銀製銚帶金具、銀製環頭太刀、銀製冠帽殘缺、陶蓋付鐵釜、鐵製壺形容器、鏡、刀子、檢身等の鐵製品（主櫛内）、大形土器類、馬具類、鐵身、槍身、斧頭、等の鐵器（副櫛内）また勾玉付金製玉形垂飾、金製耳飾、勾玉付青色瑠璃玉三條連繫頸飾、鐵製札板、鐵槍身、青色瑠璃玉連條付鐵刀子（主櫛内）土器類、馬具、雲母片（副櫛内）等があつた。

なほ封土の周縁内部において石垣狀の列石が圍繞せるを見た。これは二つの主櫛を中心としてほゞ瓢狀な配置をとり、したがつてその封土の外形元來瓢狀をなしてゐたのではないかと考へられて甚だ興味が深い。（齋藤忠記）

●樂浪古墳の發掘

平壤附近大同江面の樂浪古墳の發掘は今秋も引つゞき行はれ

まづ鐵道に近い將進里の第四十五號墳、第三十一號墳が發掘された。前者は塚室の三室墓で、大きな封土があり、盜掘されてゐたが、明器の瓦器類及び金銅鑿などを出土した。後者は木槨墓で、封土中より多數の石器(石劍、片刃石等)、土器(赤色及び鼠色土器、角形把手のもの繩磨文のものあり)を出土した。これにより注意されるが、西棺内よりも石鏃の斷片が出た。木槨は普通に見る如く丁字形に仕切つて、三竇とし、その最大の長方形の室に二木槨を収めてゐた。西棺は棺頭の側面に四葉座を描き蓋側には鋸齒文を描いてゐる。側室よりは「西工官作」利部などの銘ある漆器、盤龍鏡などを出土した。

貞柏里では第一九號、第二百十二號墳が發掘された。前者はほゞ普通の木槨墓で、盜掘されてゐるが、それは土器のみで、副葬品は多數出土した。そのうち繪畫ある瑛瑠片(小畫)は最も重要な繪畫資料であり弩機及びその弓(長一米十)は當代弩機の全貌を傳へる重要な資料である。そのほか虺龍飾玉佩の劍、内行花文鏡があり、漆器が多く、案、竈の明器を出土した。北棺は攪亂されてゐるが、南棺はものとまゝで、耳瑠、瑠瑠玉、琥珀玉、銀劍、指輪をつけた女であり、革沓を遺殘してゐる。後者もほゞ同様な木槨墓で、小高い岩山を切下げて木槨を収め、割石で充填し、土を被ふてゐる。土器、漆器など豊富で、盜掘を脱れてゐるらしい。そのうち櫛、異體字内行花文鏡や毛織物の斷片は注意される。二個の木棺内部は調査の餘裕なきため、京城に運び、博物館内にて調査を繼續しつゝある。棺はともに多

數の布にて掩はれ、屍體もまた多數、六十枚以上)の絹の布にてまかれてあつた。西棺には紗帽、帶鉤、木印(無字)、刀子、指輪があり、また帶が明瞭に認められた。東棺は女でその頭髮がその飾玉とも、そのまゝ遺殘し、帶も結びその端を垂れたまゝに残り、その下部には劍、指輪、形瑛瑠製五銖形護符を出土した。この棺は外側に多數の四葉座金具を取つて、裝飾としてゐる點が珍らしい。(梅原末治氏談、水野記)

●南滿洲營城子漢代甄墓の發掘

南滿洲營城子附近一帯は漢代甄墓の集群する處であつて、明治末年に京都帝國大學の濱田教授によつて逸早く二基を發掘せられ「牧城驛東西兩古墳」として學界に紹介せられた著名な事例を嚆矢とし、昭和六年發掘せる壁畫甄墓の如き著例を發見し既に「營城子」として東方考古學叢書第四冊に其の集録を告ぐるものであつて、南滿洲に於ける漢族植民の範例を示し北鮮樂浪古墳群との對象上興味ある一地域をなす處である。

關東廳博物館では昨秋九月更に附近に點在する古墳の發掘を試み十數日を要し三基の調査を遂げたが、一基は壁畫古墳と道路を距て、遺存するものであつて、丘陵上に若干の封土を有し地表下約十五尺にして南口する前室、主室及び側室を副ふる三室連續の塚築のものであり、各室とも四壁及天井部を完存し漆喰積となれるもので無文塚を使用せるが内壁の下半部は漆喰を以てほゞ白塗されてゐる。本墳は盜掘されて居り大半の遺物を

缺失して居つたが前室及主室には腐朽した棺材の大量を遺存してあつた。遺物として特に注意すべきものは漆畫の断片であつて、筆力のある湯雲を示せるものは従來、南滿洲に於ける此種轉墓から出土したものが無い。樂浪古墳發見のそれと比適して遜色のない點を認めるものであつた。

他の二墓は本墳より西北約半里を距つる營城子屯に近接する處にあるものであつて、附近に多數封土を遺存するもの、中、二墓を撰定して發掘を進めたが一墓は宏大なる封土を有し、作業上短時日を以て完了するは不能なる爲め漸く地平線まで掘穿して他日にゆづり、更に一墓を求め封土を縦斷して行程を進め地平にひとしき封土の中央下部に於いて棺材を遺失せるが完存する人骨一體を發見し、更にこれに接し漢系の骨壺を出土した。この骨壺の様式を推すに到底漢代近くに推すことを得ないものであつて、時代の下降せるものであることを窺ふものである巨大なる封土には何等後代の擾亂なき點から推して甌築構架等を缺失する構造等に徴し却つて滿洲に於ける墓制研究上興味ある資料を提供したものと考へられるが人骨測定によつて更に推究的年代を確められるものであらう。(島田貞彦報)

京都市左京區下鴨北園町五八 梅原 末治氏

會報

退會
藤田 穠三氏

●評議員改選

昭和九年度本會大會(十一月二十三日)に於て會則により評議員の改選投票を行ひ、その結果前年度評議員全部重任せり。

●會員動靜

入會

京都府宇治木幡

(中村 直勝氏紹介)

林屋辰三郎氏

長野市縣立女子専門學校

(宮崎 市定氏紹介)

中村 寅氏

神戸市縣立第一高等女學校

京都市下鴨中川原町五八

京都帝大東洋史研究室

(以上内田 吟風氏紹介)

八木 法忍氏

池上庄治郎氏

横山 貞祐氏

轉居

名古屋市中區三輪町七八

京都市下鴨菱倉町二四

京都市田中飛鳥井町十五

東京市品川區大井倉田町三三一八

若山善三郎氏

清水 三男氏

井上 智勇氏

藤井 貞文氏

●寄贈交換圖書雜誌目錄

渡邊幾治郎著 明治史研究 著者

内藤 智秀著 西洋史概觀 著者

新見 吉治著 歴史教育論 著者

松村 武雄著 民族性と神話 培風館

世外井上公傳 第五卷 井上馨侯傳記編纂會

史料叢刊 第五政院傳教 一帙三册 朝鮮史編修會

朝鮮史 第六編 第一卷 朝鮮史編修會

阪本 仁宏編著 殘念山本文之助鑑光 阪木 勝氏

東郷 須佐 嘉橘著 西蒙古部族考 著者

史學雜誌 四五の十、十一、十二、第十二號附錄 著者

歴史地理 六四の四、五、六 日本歴史地理學會

史苑 八の三、四 立教大學史學會

史學 一三の三 三田史學會

考古學雜誌 二四の九、十、十一 考古學會

人類學雜誌 四九の九、十、十一、四九卷第三附錄 東京人類學會

國學院雜誌 四九の十、十一、十二 國學院大學

龍谷史壇 十四
青丘學叢 十七

史迹と美術 四七、四八、四九

社會經濟史學 四の七、八

文 化 一の十、十一

郷土研究信濃 三の九、十、十一

經濟論叢 三九の四、五、六

社會學徒 八の十、十一、十二

國立北平圖書館葉 七の五、六八の一

專修學報 二

皇 學 二の三

大和志 創刊號、一の二

傳 記 創刊號、一の三

龍谷大學史學會
青 丘 學 會

史迹美術同攻會

社會經濟史學會

東北帝大文科會

信濃郷土研究會

京大經濟學會

社會學徒社

國立北平圖書館

總本山專修道場

神宮皇學館々友會

大和國史會

傳記研究會

◎評議員會開會

昭和九年十二月二十二日評議員會開會左の事項を可決した

一、史林總索引を第二十卷完了を期として出版する件

二、原稿料變更の件

三、委員減員の件